

高堰の山賊（漆原町）



昔、漆原と上野田との境界に山賊の出た小高い森がありました。そして堤防のなかつた日野川はこの近くを流れていたと言われています。

この森は高堰と言われ、村人や旅人が京へ上るのにどうしてもそこを通らなければならぬ街道筋にありました。その近くには山賊が時々出て旅人をおそつたので、旅の難所として恐れられました。

この森の近くには、漆原に続く山があり、山中腹には、大きな青溜池と、小さな赤溜池がありました。この辺りは、昼でも薄暗く気味の悪い所で、山賊たちが住みついて、朝から酒を飲んではおくちをしていて、金が無くなると街道に出て旅人をおそいました。

山賊は身の丈六尺程（一八〇センチ）もある大

男たちで、髪はぼうぼう、大きな目でギョロツと、にらみつけては、槍や刀をふり回しながら旅人に近づき、

「おい、ちよつと待て、おめえ持つてるもん、みんな置いてけ。」
とおどしました。

旅人は、ふるえながら、おそる おそる、

「これで全部ですげの、どつか命だけは助けておくんはない。」

と、身ぐるみはぎ取られて、命からがら逃げて来ました。

旅人達の話聞きながら村人たちは、

「あの高堰の道を通ると、おとろしい（恐ろしい）山賊が出て、ぜん（お金）や、持っているもんみんな取られるんにやっての。」

「ほや……おめえらも聞いたやろい。十日程前に、米を売りに行った若いもん（者）が、山賊におそわれたんにやっての、運の悪いこつちや

のう。やっともうけて来たぜんをみんな取られて殺されてしもたんやつての。」

「ほいてどうしたんやろの。」

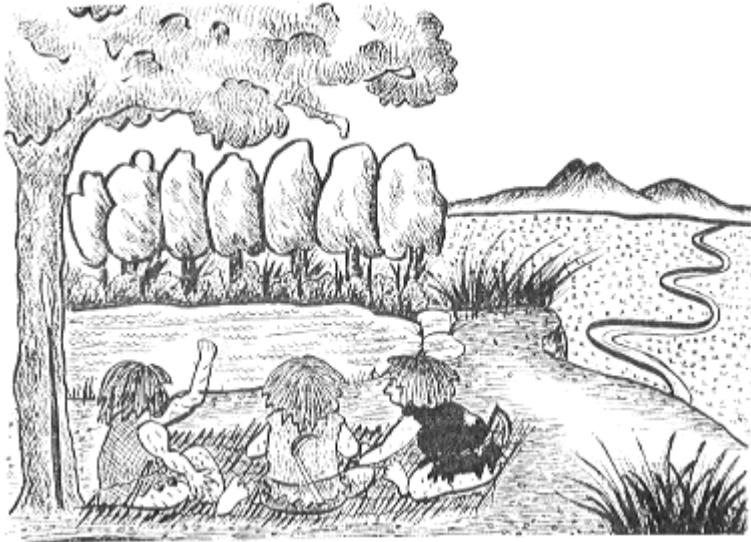
「ほいてその若いもんは、山の中の溜池に捨てられてしもたんやつての。家のもんは、ほんな事なあん知らんで、今日帰るか、あした帰るやろかと、ずうつと待っていたんやつてつ。ほれがあのおう、山賊に殺されたつて分かったら、としより（年寄り）のおつつあ（お父さん）も、おつかあ（お母さん）も寝込んでもてるんやと。」

「なんてもつけねえ（かわいそうに）のう。」

「ほいて（そして）今のき（今でも）溜池の水が血に染まって赤いらしいぞ。」

「あんなおとろしいとは、うらら（私ら）は通られんわの。」

このように、村の人はもち論、旅する人々も、方堰と聞くと恐ろしくて、震え上がりました。



そしてこの高堰を通って旅に出るときは、一度と帰れないかも知れないと言って、注水杯みずさかずきを交かわしたそうです。



このように、うわさはうわさと呼んで、旅の難所としての高堰の名は知れ渡り、旅人や飛脚たちは、無事に高堰を通り越すことができる、やれやれと安どの胸をなでおろしたそうです。

村の人たちは、悪い山賊をなんとかして、追い払いたいものだと思案しましたが、どうすることもできませんでした。

それから長い年月が過ぎ、日野川の流れも変わり、高堰の森は開墾されて畑になりました。

昭和四十三年から四十六年にかけて、川や田んぼが整備され、昔、山賊が出て恐れられた街道や血で染まったと言われる赤溜の池は、現在は影も形もありませんが、高堰という地名と赤溜の池の名前は今も残っています。

注 水杯

生きて帰られるか、どうか分からない、という時に酒の代りに水を盃について飲み交すこと。